

## 伊予国における中世から近世への城郭の変化と城下町の形成

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-06-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 上利, 博規 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008836">https://doi.org/10.14945/00008836</a>

# 伊予国における中世から近世への 城郭の変化と城下町の形成

上 利 博 規

## はじめに

伝統的文化と近代的文化との対置は、しばしば見られる図式である。しかしながら、江戸時代における文化の具体的なあり様を探ると、そこには意外に近代的な発想が隠されていることに気づく。たとえば、日本における「水の文化」の歴史的過程を遡れば、伝統的な水文化に対し、明治以降の近代的上下水道の設置が対比され、住民による水の共同管理が役所の水道局の管理下に置かれるようになった、と図式化できよう<sup>1</sup>。しかし、日本の治水施策を追跡してみると、既に戦国時代から江戸時代にかけて、藩主たちによる近代的な治水施策が取られるようになっていたことがわかる<sup>2</sup>。戦国時代から近世にかけての築城とそれに伴う城下町の形成において、戦国大名や藩主たちによってその治水施策のあり方が問われていたからである。そして、江戸時代に入ると、江戸の町の発展に伴って、その治水施策はより近代的な手法を用いたものへと変化する。

それら戦国時代から始まる様々な治水施策の基軸となったものとしては、一つには織田信長による中世城郭から近世城郭への変革がある。信長は「永楽通宝」を旗印にし、農業中心（米作）の社会から商業中心（交易）の社会への変化を考えていたが、われわれは城郭の変革過程にも、信長の近代的発想を見ることができる。それは、信長が関わった城、すなわち那古野城、小牧城、岐阜城、安土城とその城下町の変遷として具体的に展開されたものである。そして、信長の後を継いだ豊臣秀吉が築いた大阪城とその城下町に一つの完成形を見ることができる。

さらに、秀吉と行動を共にし、秀吉から影響を受けた二人の武将、すなわち築城の名手とうたわれた熊本城などを築城した加藤清正と、和歌山城、宇和島城、伊賀上野城などを築城した藤堂高虎に、近世城郭のあり様を見ることができる。そして最後に、家康以降の将軍による江戸の治水施策などがある。

これらの大筋については、既に「城下町の治水施策」において論じたところであるので、本論では特に伊予国<sup>3</sup>における中世から近世への城郭の変化と城下町の形成のあり様について述べたい。伊予国は、現在では東予、中予、南予の3つに分けて考えることが一般的であり、本来ならば東予の今治、中予の松山、南予の大洲・宇和島<sup>4</sup>に即して考えるべきところであるが、東予の今治については本論で扱うには至らず、次の機会に譲りたい。

以上から、本論では、まず伊予国（ここでは松山、大洲、宇和島）における中世城郭と近世城郭が1585年の秀吉の四国征伐によって一つの断絶を作っていることを確認する。すなわち中世における室町幕府の将軍の館の模倣から、近代的で合理的な求心的組織化への転換である。次に、近世城郭としての松山城、大洲城、宇和島城の築城にあたって、それぞれ伊予川（重信川）、肱川、神田川と辰野川という河川の氾濫をいかに抑え、いかに堀としての軍事的活用、湊としての産業的活用などに転じられたかについて論じる。そして最後に、それら3つの城下において町がどのように形成され、その町割などからそれ

<sup>1</sup> 拙論「水から考える環境の文化的価値 —— 対症療法ではない環境倫理のために」『文化と哲学』第30号、静岡大学哲学会、2013、p.57-86。

<sup>2</sup> 拙論「城下町の治水施策」『アジアの近代化と水』静岡大学超領域共同研究、平成25年度報告書、2014、p.4-23。

<sup>3</sup> 伊予国を取りあげるのは、一つのケーススタディであること以上の大きな理由はないが、論者が伊予国に注目するのは、一つには松山には加藤嘉明が築城した松山城があるが、中世城郭として湯築城があり、両者の間の大きな断絶の意味について考えたいということ、もう一つは大洲城、宇和島城がいずれも藤堂高虎によって和歌山城の後に築城され、高虎はその後現在の三重県に移り、伊賀上野城、津城を築城・改修しており、藤堂高虎の築城の過程を知る上で重要と考えた、などの理由による。

<sup>4</sup> 南予地方は、江戸時代の大洲藩と宇和島藩とその支藩にほぼ相当している。

ら城下町の形成における理念がどのようなものであったかを探りたい。そして、平和な時代を迎えた江戸時代においては、戦国時代の城を中心とした城下町の求心的組織化は次第にその意味が薄れ、産業を中心とした城下町の発展へと変化するのである。

## 1 伊予国における中世城郭と近世城郭

### (1) 中世までの伊予国

古代の日本は律令制などを通じて国家的制度の確立を目指し、五畿七道や国・郡などを定めた。伊予国は南海道の一つとして定められ、現在の今治市に国府や国分寺が置かれた。平安時代中期に入ると、次第に令制国とその中央集権的統治は崩れ始める。それは、荘園の成立や武士の登場として広く知られているところである。そして、中央の力の衰退と共に地方で戦乱が起きようになる。900年代に起こった平将門の乱、藤原純友の乱がその代表的なものである。平将門は939年に常陸国府を包囲し、国司の藤原維畿を追放した。同じ頃起こった藤原純友の乱は、伊予掾であった純友が任期後も京都に戻らず、讃岐の国府などを襲った事件であるが、いずれも地方行政の要であった国司がうまく機能しなくなっていたことをうかがわせ、古代国家体制から中世国家体制への移行の始まりとして捉えられる。このような地方の内乱が国家のあり方にまで影響を及ぼすようになり、時代は中世へと移る。

中世の伊予国の中では、南北朝の争いの中で北朝方についた河野氏が松山市の湯築城に入り、南朝方と争った。また、宇和島については、純友の乱の際に功績のあった警固使の橘遠保が941年に居城を始めたが、鎌倉時代に西園寺氏が橘氏にとってかわり、その後およそ340年に渡って統治した。また、松山と宇和島の間位置する大洲は、1221年に伊予国の守護となった宇都宮氏の子孫が1330年大洲の分国守護として入った。こうして現在の松山、大洲、宇和島は、それぞれ河野氏、宇都宮氏、西園寺氏の支配するところとなり、それぞれがそれぞれの中世城郭を築いた。松山の河野氏の場合には湯築城、大洲の宇都宮氏の場合には地藏嶽城、宇和島の西園寺氏の場合には松葉城（岩瀬城）、板島丸串城、黒瀬城などである。

### (2) 1585年から始まる近世城郭

これらの中世城郭が大きく姿を変えるのは1585年からである。その直前の1582年の本能寺の変によって土佐の長宗我部の討伐が消え、信長を継いだ秀吉が近畿を制圧するために和歌山の紀州征伐を行っていた頃、四国では長宗我部元親が阿波、讃岐、そして宇和島の西園寺氏、松山の河野氏などを次々に下して四国統一を成し遂げていた。

これを見た秀吉は長宗我部元親の四国統一を認めず、元親に讃岐と伊予を譲るよう要求したが、元親はこれを拒否したために、秀吉の四国征伐が始まった。この戦いによって、阿波、伊予、讃岐が没収され、元親には土佐だけが残された。そして、阿波は蜂須賀家政に、讃岐は仙石秀久に、伊予は小早川隆景に与えられた。これが1585年の夏のことであり、秀吉が関白になるのもほぼこの時期である。

毛利元就の三男であり、小早川家の養子となった隆景は湯築城に居を構えた。そして、隆景の養子になっていた小早川秀包に大洲を任せ、宇和島は持田右京を城代とした。その後、秀吉による九州征伐にも参加したために、筑前、筑後などの石を与えられ、筑前に強引に移封させられ、残された伊予国は秀吉の家臣である戸田勝隆に譲られ、宇和島には城代として戸田与左衛門が入った。1587年のことである。また、湯築城には福島正則が入ることになる。しかし、数年後勝隆が急死したために、藤堂高虎が宇和島、そして大洲に入ることになる。1595年には福島正則が清須に移封になったため、1595年に加藤嘉明が松前町の松前城に入って松山の地を支配し、1603年には嘉明は松山城に移った。こうして、加藤嘉明による松山の松山城、藤堂高虎による大洲の大洲城、藤堂高虎による宇和島城という、近世城郭の建築が始まる。

以上のように、伊予国の近世城郭は、1585年の秀吉による四国征伐の後に、加藤嘉明、藤堂高虎といった四国にはゆかりのない人によって急遽行われたのである。したがって、彼らの近世城郭の建築手法は、四国の外から伊予に持ち込まれたものであり、中世までの城郭建築の方法とかなり異質なものであった。では、それは具体的にはどのようなものであったのか。まず、城と城下町建築にあたって、彼らがいかに治水に取り組んだかという点から見てみこう。

## 2 近世城郭の築城と治水

### (1) 四国の河川

四国の川といえばまず吉野川、四万十川が思い浮かぶが、ほかにも徳島県の剣山から流れ出て徳島県を通り紀伊水道に注ぐ那賀川、高知県の白髪山から流れ出て注ぐ物部川、石鎚山から流れ出て高知県を通り土佐湾に注ぐ仁淀川、香川県の土器川などがあり、伊予国を流れる大きな川としては、松山を流れる重信川、大洲を流れる肱川などがある。国土交通省によれば、重信川は「幹川流路延長36km、流域面積445km<sup>2</sup>」、肱川は「幹川流路延長103km、流域面積1,210km<sup>2</sup>」である。宇和島の場合には、宇和津彦神社の神田領から名前をとった神田川（じんでんがわ）が、辰野川と共に、宇和島城築城の際に外堀として使われた。

門田恭一郎『愛媛の水をめぐる歴史』（愛媛文化双書刊行会、2006）によれば、「愛媛県の河川の多くは、地形上流域が狭く急流で、たび重なる土砂の流出により天井川を形成し、豪雨の際には流量が急増し、堤防・護岸等の決壊や氾濫による浸水被害がたびたび発生している」（p.3）。そして、大洲の「肱川は特に洪水の多いことで知られ、…元禄元年（1688）から万延元年（1860）の172年間で75回の出水による災害の記録が残されている」（p.5）という。

他方では、愛媛県は湧水が多く、「愛媛県は泉を用水源として利用している割合が14.8%と全国的にみても千葉県に次いで多いところとして知られていた（明治42年農商務省調）」（p.20）という。つまり、築城においては氾濫を繰り返すそれら大きな河川を、いかに制御するかということと、それら豊富な水資源をいかに活用するかが問われることになる。

### (2) 松山城と治水<sup>5</sup>

松山平野を流れる重信川はかつて松山城築城以前には伊予川と呼ばれていたが、その伊予川の治水に努めた足立重信の名をとって今日重信川と呼ばれるようになったことは、地元の人たちはよく知っている話である。その概略は以下の通りである。

松前城の城主であった加藤嘉明は、毎年氾濫を繰り返す伊予川の改修を、「土木治水に精通す」といわれた足立重信に命じた。それまでの伊予川はほとんど自然にまかせて曲がって流れており、一旦水量が増えて洪水が起これば道後平野やその地の家屋は荒れてしまっていた。現在重信川は松前町と松山空港の間を流れているが、かつては松前町の南から海に注いでおり、したがって洪水の際には松前城にも被害が及びかねない状況であった。

そこで重信は、堤防を築いて伊予川の川筋を北に移し、河川の流れを直線に変えることによって水流を緩和した。こうして伊予川は周辺の田畑への水害は減り、松前城周辺の三角州の荒れた田も次第に良田となった。そして、この工事の後に、伊予川は重信川と呼ばれるようになった。

しかし、海に近い松前城は風雨にさらされることにかわりはなく、加藤嘉明は松前城から松山の中心部の勝山に城を移すことを決意する。それに伴って、石手川の改修に着手する。重信は、道後平野東部から松山城の南を流れて海に出る湯山川と呼ばれていた石手川の治水工事が必要と考え、湯山川を城の

<sup>5</sup> 松山城の築城にあたって加藤嘉明がいかにして治水の問題に取り組んだかについては、既に「城下町の治水施策」で述べた。



手前で南西に折れ曲がらせ、城のかなり南で伊予川と合流させた。現在石手川と重信川はJR市壺駅付近で合流しているが、道路で言えば大洲街道（56号線）の「出合大橋」、あるいはその西の326号線の「出合橋<sup>6</sup>」という名前に残っている。

このように、伊予川や湯山川の流れを大きく変えた重信であるが、その際、勢いのある川の水をどのようにして安定的に曲げるかということが問題となる。その解決策は、岩を利用するというものであった。重信は、石手村の岩石を掘り割って堰として流れを変えた。こうして、堅固な堤防を築いて川の氾濫を防ぐとともに、川を城の防御に利用し、さらに灌漑用水路としても活用したのである<sup>7</sup>。

特に、暴れ川である伊予川の流れを抑えるため使われたのは、清正の霞堤や清正の石剝に似た鎌投げと呼ばれる方法であった。鎌投げは、岸から突出した岩石の組み合わせを左岸・右岸互い違いにおく方法である。

### (3) 大洲城と治水

大洲城が面している肱川は、勾配が緩やかなために、その名の通り肱のように川が大きく曲がり、洪水が起こってもなかなか水がはけなかった。そのため、大洲城藩主たちは、治水対策に悩まされ、堤防の建築や掘削などにとどまらず、水番を置いて定期的な水位観測を行っていた。

四国地方建設局大洲工事事務所が1965年に刊行した『肱川改修20年の歩み』によれば、「現在の大洲は湖底であり、人家は薦田地区に密集し、ここで農耕が営まれていた。その後上流からの堆砂により除々に（ママ）、盆地を形成し、元弘元年（1331年）大洲城の築城を境として武家屋敷や商家が集まり今の大洲の前征を構成した。そして肱川も今の個所より南よりの山手の方を流れていたし、久米川も城のすぐ下流を流下していたが築城のため現在地に開削をした。そして洪水時の水流を川を中心部に導き、土砂を沈殿させたり、堤防の破堤をくいとめるため水制（当地方ではナゲという）を要所要所にこしらえた」（p.39）という。

この記述では、大洲城の築城が1331年とされているが、それは宇都宮氏による地蔵嶽城の築城のことであり、この時に「武家屋敷や商家が集まり今の大洲の前征を構成した」という近世城下町ができたわけではない。また、ここに現れる「ナゲ」は先述の鎌投げに相当するもので、この方法は戦国時代から江戸初期に普及した方法である。『大洲市誌』ではこの点は改められており、大洲藩二代藩主の加藤泰興の頃（1623～1674）に石垣施工の明治である反田八郎兵衛に築かせたとしている。この「ナゲ」は現在でも8か所に残っているといわれ、大洲城下町に渡されている肱川橋からも見ることができる（写真1）。また、文化10年（1813年）の古地図にもこの「ナゲ」が描かれている（図1）。



写真1 肱川橋から東の上流側の「ナゲ」



図1 古図にも書き込まれている「ナゲ」

<sup>6</sup> 「出合橋」がかかるのは1911年のことであり、それまでは渡し舟があった。

<sup>7</sup> 1721年に石手川が決壊したため、藩主の松平定英は改修工事をしない現在の姿となった。

「ナゲ」は水流を中心部分に集め岸への圧力を弱めることにより破堤を食い止めることを狙ったものである。また、敵の侵入を防ぐために「川の流れを変え大洲城の背面に深淵を形成させる役割として設置されたもの」ともいわれている。「ナゲ」の下流側は流れが弱くなるために、渡舟を係留したり、荷の積み下ろしのために利用されてきた。ほかにも、肱川の治水のために防水林が設置されたり（「御用藪」「藩用藪」と呼ばれた河畔林）、洪水後の測量の手間を省くために「境木」を植えたという<sup>8</sup>。

#### (4) 宇和島城と治水

長い間支城の位置にあった宇和島城の来歴ははっきりしないことが多い。1585年の秀吉の四国征伐により小早川隆景に与えられてからは、持田右京が城代となる。また、1587年に戸田勝隆の領地となつてからは戸田与左衛門が城代となっているが、いずれも現在みることのできるような宇和島城の姿ではなかった。1595年に藤堂高虎が宇和郡七万石の領主となり、この城を本城と定めてから築城が始まり、1601年に今日のような姿になった。したがって、宇和島城の築城に伴う治水は、この時の藤堂高虎によるものである。

高虎はすでに秀吉のもとで大和郡山城、紀州和歌山城など、築城の経験は豊かであった。和歌山城は1585年の秀吉による太田城の水攻めの後に、秀吉が藤堂高虎に命じて作らせた城である。紀ノ川の伏流水のため、和歌山城内には金明水、銀明水をはじめとする井戸が多数あった。また、城の北部に作られた城下町は、和歌川と紀ノ川を結ぶ堀川を外堀とした。このように築城の経験を積み重ねてきた高虎ではあるが、自らの居城を築くのは宇和島城がはじめてであった。

宇和島城築にあたっては、高虎は和歌山城と同様に、二つの川を利用して城下町を作った。すなわち、辰野川と神田川である。この二つの川をつけかえて外堀とし、さらに海から水を引き込んだ内堀との間に後述するような城下町を作ったのである。

### 3 近世城下町の形成とその理念

以上が、1585年を大きな変節点とする、伊予国における近世城郭の建築の際に行われた治水の概略である。次に、城郭の周辺の近世城下町が、どのような意図を以て組織的に作られたのかについて考えてい。

そのために、まず近世の城下町が、どのような特色をもっていたのかについて触れておきたい。論者は、近世城下町の形成の過程と理念を探るには、那古野城から小牧城、岐阜城、安土城に至るまでの信長の城下町の作り方を見ること、特に与えられた城としての那古野城に対して、自ら作りあげた小牧城の構造と機能を見ることが有用であると考えている。

#### (1) 求心的な近世城下町と治水

中世の城郭は、城とはいっても館、あるいはその発展形であり、近世城郭のような石垣をもたず、門や屋根は板である。このような館城が大きく変化するのは1500年代後半であるが、変化したのは城の形だけではない。永楽帝の時代に作られた「永楽通宝」を旗印にしたことや楽市楽座に象徴されるように、信長は農業よりもむしろ商業や貿易に目を向けた。そして、それは城下町の作り方に大きな変化をもたらした。

那古野城で生まれ育った信長は、1555年に清須城を奪いここに移り、1560年の桶狭間の戦いにはこの清須城から出発したことは広く知られているところであるが、しかし信長は清須城を作ったわけではなく、清須城の構造は京都の將軍の館を模倣する中世的なものにとどまっていた。これが大きく変化するのは、1563年に小牧城に移ってからである。ここから近世的な城下町作りが始まる。近世城下町は、武

<sup>8</sup>『大洲市歴史的風致維持向上計画』「第2章 1 (1) 肱川と共生する人々のくらしにみる歴史的風致」大洲市役所、p.49f。

士が集中して住む場所としての武家屋敷、商工業者が集中して住む町屋、そしてそれらの周辺に寺社が置かれる。

いろいろなものが並置されるのではなく、自分を中心とした求心的な組織化を好む信長は、そのような合理的組織としての城下町を作るにあたって、武家屋敷と町屋を合理的に配置した。すなわちわれわれがよく知っているところの格子状の町である。とはいえ、格子状の町は、既に平城京などにおいて成立していることをわれわれは知っている。両者の違いは、千田嘉博『信長の城』（岩波新書、2003、p.78f.）が指摘するように、正方形街区から短冊型の長方形街区への変化である。これによって、現代の町割とは異なった、道を挟んでの町、道に面した間口と細長い建物、背後に四角に開いた空間の会所としての利用、そして「背割下水」を境としての背中合わせになる町屋と町屋、という町作りが行われた。小牧城から始まったこうした計画的町作りは、秀吉にも継承され、大阪の町には「太閤下水」が作られ、また駿府の町作りもこれを継承している。

また、鉄道や自動車が登場する以前の近世においては、交通手段は水運によるものが重要であり、城下町を作る場合には常に舟を近くに寄せることができるようにした。城における堀は、一つには防衛上のものであるが、一つには産業上のものでもあった。小牧城の場合には、清須にまで通じる川が小牧城の南西の「舟津」まで通っている。江戸時代初期に名古屋城建築にあたって、資材を運搬するために、伊勢湾から名古屋城西まで運河「堀川」が開削されたことは、その象徴的な例であろう。

こうして、近世城下町は、城下町の人々に食糧を供給する田畑を背後に控える場所、物流のために水運の便のよい場所、城下町に住む人が飲み水に困らない場所、つまり川に近い場所に置かれることとなる。そのために、既に述べたように、近世城郭の建築にあたっては、まずマクロな視点での治水が必要となり、大きな川の洪水などをいかに制御するかという問題が浮上する。次に、内堀・外堀を作りながら、城及び城下町内における上下水道の整備がなされる。その際には、外部からの持ちこみと外部への持ち出しのための舟運が求められ、このことはひいては城下町における産業の育成という問題とも関連することになる。

## (2) 松山城下町の形成の理念

松山城は標高132mの勝山の上に立つが、勝山の西側を削った平地を堀と石垣で囲んで二之丸とし、そこに御殿を置いた。さらに南西部に三之丸を作り、外堀で囲んでいる。松山城は、姫路城、和歌山城<sup>9</sup>と並んで日本三大平山城と呼ばれるが、構造的にはよく似ている。

松山城には、太鼓門を本丸へと入ってすぐの所に大きな井戸がある。深さ44m、水深9mのこの井戸は戦前までは使うことができたといわれている。また、山頂に井戸がある理由は、もともと井戸の近辺は連山の谷間にあたる場所であり、築城に際して谷を埋め立てたが、谷間の水が湧き出ている部分に石を積んで井戸にしたからである。また、二之丸御殿には、大きな井戸が公開されている。

加藤嘉明は、1602年から、現在県立美術館などが置かれている三之丸をはじめとする武家屋敷の町割をはじめ、続いて城の東、南、西の町割に着手した。基本的な構図は、城の東に武士、南に上級武士、西に町人、北に寺院という配置である。武家屋敷と町屋の配置については、物資の運搬が西の海から川を遡ってくるという産業上の視点から（したがって敵が攻めて来るといふ軍事上の視点からも）と、川が東から西側に流れることを考えれば、城の西側に町屋を置くことは順



写真2 松山城二之丸御殿の大井戸

<sup>9</sup> 熊本城とされる場合もある。



当であろう。これら城西北部の町は、古町と呼ばれる<sup>10</sup>。

古町は、まず第一には城下の武士たちの生活に必要な物質を調達するために必要な商工業者が呼び集められた。それらを列挙すれば、衣服に関する呉服町、紺屋町、食に関する魚屋町、米屋町、住に関する畳屋町、利屋町、鍛冶屋町などである。これら古町は、「古町三十町は古来より年貢免許」（『内山家記』）として特権化され、旧城下町であった松前町などから集まって来て、古町の中に松前町などを新たに形成した。その中には、松前町から移った曾我部家、後藤家や、藩主加藤家の家臣が後に商人となった栗田家などがあつた。

このことを信長による小牧城の城下町形成と比較するならば、次のことがわかる。すなわち、『信長の城』によれば、「戦国時代の城下町は、城（城館）を中心に大名と武士・直属商工業者が住んだ惣構えで守られた町と、それから空間的に分離した市町によって二元的な構造をもった」（p.52）が、小牧城への移転においては「家族を含めた引っ越しを迫られたのは、清須に結集してくらしていた信長の直臣だった」（p.68）のであり、「信長が直臣たちに対して、屋敷の配置を直接指示」（p.68）して、「自らの意志で武士たちの屋敷を配置して、信長の城を唯一の核とした求心的な城下町を築こうとした」（p.68）。松山城下の古町も、三十町のうち加藤嘉明自身が二十町を定め、その中心に松前城以来の関わりが深い者を集め松前町としたのである。本丸、二之丸、三之丸をはじめとして、家臣をどのように配置するかは、既に城下町における武家屋敷形成の上で常識となっていたが、松山城下町の町屋についても信長の求心性は求められていたのである。近世城下町の町としての中心の目印の一つは、主要街道が交差する場所に設置された高札に由来する「札の辻」がある。松山城下においては、本町三丁目の交差点の東に石碑が設置されている。道路を挟んだ西側が松前町（二丁目）である。



図2 松山城下町の町割

そして、それはやがて古町の外に広がってゆく新しい町との関係においても続くのであつた。すなわち、古町の中でも中心的位置を占める松前町など、そして特権が許されていた古町、さらにその外側に広がってゆく新しい町という三重の構造である。

しかし、特権をもたず年貢を納めなければならない町としての新しい町、いわゆる「外側（とがわ）」<sup>11</sup>は、城下の南東などに広がり、そこには武家屋敷があり、武家屋敷の人たちにとっては生活必需品は古町よりも自宅周辺のこれら新しい町から調達するようになる。県庁周辺は一番町、二番町、三番町とよばれかつて武家屋敷だったことがうかがわれるが、その南の「外側」は湊町、千舟町などの名前が現在にも残っており、松山市駅を流れる中の川を用いて物資を運んでいた。現在、この地域は昭和初期に名づけられた「大街道」「銀天街」と呼ばれている。

## (2) 大洲城下町の形成の理念

大洲城下町は、武家屋敷以外の町屋は、江戸時代前期からその終わりまでおよそ300軒余りで、あまり大きく姿を変えていないので、現在残されている古図のいずれを用いてもそれほど大きな差はない。それらの古図によれば、城の南、西は武家屋敷であり、東側に町屋が並んでいる。その町屋は、川に近い北側から、本町、中町、末広町（裏町）、及びそれらの東側の志保町（塩町、柚之木町）である。『愛媛県地誌Ⅱ』には末広町の南に片原町の名も見える。しかし、それらの町は、呉服町などの職人の名を付した町名をもってはいない。

<sup>10</sup> 図2の左上の「町屋敷」の部分。「松前町」はその最も南側の部分であり、古町の中心であつた。

<sup>11</sup> 図の武家屋敷の南側の地域であり、ほかにも図の右側のように町屋は広がっていった。



大洲城下町についての文献が現れるのは、1605年に塩屋町の名が出てからである。1643年の「大津惣町中之絵図」によれば、町屋は縦と横の比が1：4程度の短冊型の長方形街区である。澄田恭一『大洲・内子を掘る』によれば、彼ら町屋のうち5人の町年寄として有力であったことが、奉行所に提出された「十人組長」から推察される<sup>12</sup>。



図3 大洲城と城下町



写真3 現在の外堀、学校のグラウンド

ところで、大洲城下町を歩くと、城の東側の外堀の広さに目を奪われる。西側の外堀は一般的な広さでしかないが、東の外堀は80mほどもある。しかも、絵図からわかるようにこの外堀は、川からまっすぐに引き込んであるのではなく、榊形のように直角に曲がっている。また、西の外堀と結ばれていない。論者はこの奇妙な形の理由がよくわからなかったが、大洲史談会『温古』（復刊第32号、2010）に掲載された村上光『『元和絵図と中島』幻想』は、この外堀を町人町の南側の「中島」と結びつけ、かつてこの外堀は肱川を使う舟運の湊であったのではないかとしている。確かに、広大な東外堀は町人町南の中島と水路で結ばれている。この水路は、現在でも大洲市役所の南側と大洲中学校の間の水路として残っている。村上は、かねてから存在したこの大洲＝大津湊を、藤堂高虎が大洲城を築城する際に外堀として整えたのではないかと、いう。さらに興味深いのは、この中島の奥、つまり東側の屋敷が大きいことを指摘している点である。つまり、大洲城とその城下町の場合には、高虎は地蔵嶽城の頃の大洲＝大津の町を生かして、しかし軍事的な視点を強化して城と城下町作りを行なったということになる。



図4 東外堀と中島（拡大図）



写真4 東外堀と中島を結ぶ現在の水路



図5 中島の地割

<sup>12</sup> 澄田恭一『大洲・内子を掘る』アトラス出版、2007、p.267。

肱川には、明治から大正にかけておよそ40余りの湊があり、『大洲市誌』によると大正初期には200を超える舟があったという。長浜に至る肱川の流れの中で、大洲はちょうどその中間に位置している。江戸時代においてその前期から終わりに至るまで、大洲城下町の家屋数が300余りと変わらないことを併せて考えれば、確かに大洲城下町は近世城下町として大きく生まれ変わったというよりも、少なくとも明治以降の陸上交通の発達に至るまで、中世からの河川と舟運中心の構造はあまり変化しなかったのかも知れない。



図6 「肱川の河港図」『大洲市誌』

### (3) 宇和島城下町の形成の理念

宇和島の城下町は、中世までの西園寺氏にかわって、1585年の秀吉の四国征伐の後に<sup>13</sup>小早川隆景、戸田勝隆の手を経て、1595年から宇和島に居城した藤堂高虎の手によって作られた。宇和島城は五角形という変わった形をもつことで知られているが、その城下町は、既に述べたように、高虎が付け替えた東の辰野川と南の神田川を外堀とするものであった。

城下町の町割は、内堀と東の外堀（辰野川）の間に町人町が作られ、内堀の内部の丸之内側、及び内堀と南の外堀（神田川）の間に武家屋敷が作られた。元禄時代の古図では、内堀から遠ざかるに連れて屋敷地が小さくなってゆき、南端は足軽の町になっている。東の町人町については、南北方向に3つの通りが走り、それぞれ袋町通、本町通、裡町通という名前がついており、やはり短冊型の長方形街区となっている。

宇和島城下町で興味をひかれるのは、時代に伴う城下町の発展の様子である。もともと宇和島城は、海に突き出た五角形の形をしており、二辺は海に面し、陸側の三辺のうち、南側の二辺に武家屋敷、東側に町人町が形成され、武家屋敷のさらに南側は山に、東側の町人町のさらに東側は寺、そして山である。つまり、城下町は海に突き出た城と山の間で作られたものである。したがって、その敷地は予め限られたものであった。そのような制限をもった町が時代と共に拡張するとなれば、今日では山を削るということも考えられようが、当時としては海を埋め立てる方向で町の拡張が行われた。『宇和市誌(下)』には、時代を追って埋め立てによって城下町がどのように変化したかの比較図が掲載されている。

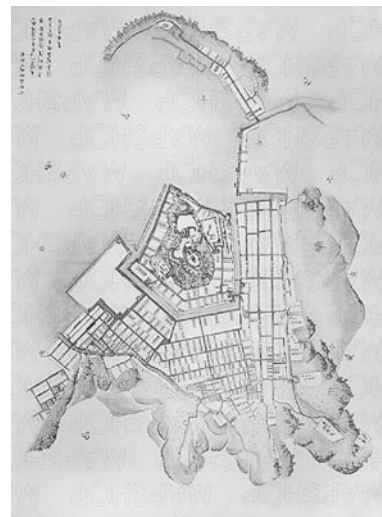


図7 宇和島城と城下町

それら絵図を比較すると、大きくわけて、3つの個所の拡張が行われたと考えることができる。それを示したのが下の図8である。その一つは図の右上の○で示したあたりの町人町の北川の拡張であり、

<sup>13</sup> 正確には、1584年に長宗我部氏のもとに下っていた。

現在の栄町港交差点やJR宇和島駅にあたる。このエリアの拡張は、主として1600年代になされている。残りの二つの○で示したエリアは、正徳年間と文久年間の図の違いとして現れているので、おそらく1700年代から1800年代前半にかけて拡張されたのではないかと推測される。左上のエリアは、現在の宇和島市役所とその北側の寿町、朝日町、弁天町あたりである。左下のエリアは、現在の鶴島小学校、城南中学校、明倫小学校、そして明倫町、榊形町に相当する<sup>14</sup>。こうして、海に突き出ていたはずの宇和島城は次第に周りを土で埋められ、現在の長崎の出島と同じような状況になった。

では、埋立によって拡張された土地は何に利用されていたのか。第一の拡張地である町人町北川の土地は、主として町人町がそのまま延長され、恵美須町、船大工町などが作られた。町の東を流れる辰野川が町の北で西側に折れてしばらくした所に恵比須神社があり、その北が現在も恵比須町と呼ばれている。七福神の一柱である「えびす」は外来・渡来の神であり、恵比須神社は海からやって来る者を迎える場所である。ちょうど外堀の辰野川と海から水を引いた内堀が合流する場所にあたっており、宇和島の湊の玄関の意味をもっていたことがわかる。その北側を埋立によって整えたということである。船大工町という名前とあわせて考えると、江戸時代における海運の発達によって、従来の町人町が北側に拡張されたと推測されるのである。

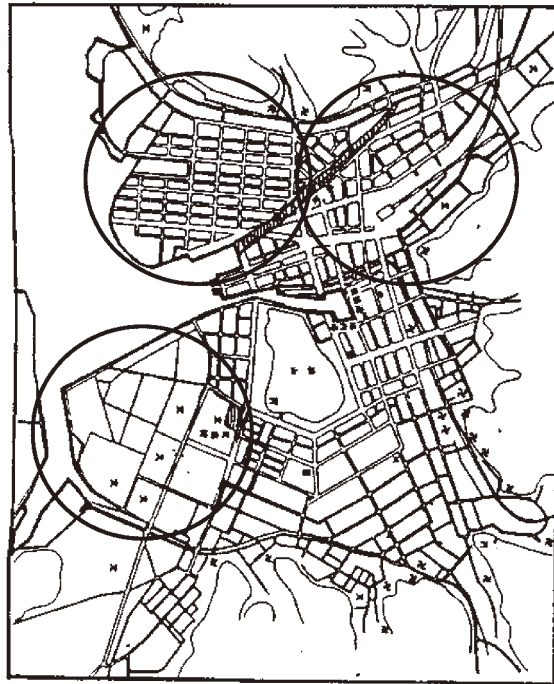


図8 城下町の埋立拡張 (○の部分)

残り二つの拡張地であるが、文久の頃の古図によれば、これらはいずれも新田として使われていたことがわかる。すなわち、城の北西側の埋め立て地には、下村新田、山下新田、富堤新田の名が見られ、城の南西の埋め立て地には、岡村新田、兼助新田などの名が見られる。

## おわりに

以上、伊予国（松山、大洲、宇和島）における中世から近世への城郭の変化と城下町の形成のあり様について、まず1585年の秀吉による四国征伐に伴う中世から近世城郭への断絶的变化について、次に近

<sup>14</sup> 東高校は、1700年代初頭に「浜御殿」として既に埋め立てられていた。



世城郭と城下町建築における軍事的、あるいは産業的な視点からの求心的組織化と治水という近代的施策について、そして最後に城下町の町割とその発展などについて考えてきた。

何よりも注目したいのは、それら近世城郭と城下町の形成は、その地に長らく居住していた人たちの手によるものではなく、四国征伐に伴って秀吉に命じられて他の地域から赴いた人たちの手によるものだった点である。いわば、彼らは当時の最先端の治水技術、築城技術などをもって伊予国にやってきたのである。そして、戦国時代の頂点に立つ彼らは、軍事的な視点と、信長以来の産業的視点とを織り交ぜながら、それぞれの地で城と城下町を作った。

加藤嘉明が作った松山城の場合には、中世の湯築城とは異なった場所に作られたために、従来の町とは異なる町が城の西に新しく作られた。しかし、それら求心的に組織化されたと思われた町も、次第に武家屋敷周辺に新しい町「外側」が自然的に発生し、それが今日の「大街道」「銀天街」という、松山市の最も賑わう場所となったのである。

藤堂高虎の手による大洲城とその城下町は、中世までの地蔵嶽城の上に作られたために、地蔵嶽城や城下町がいかなるものであったかを遡ってうかがい知ることが困難になっている。しかしながら、陸上交通が発達するまでは舟運を利用した生活は中世からそれほど大きく変わっていないのではないかとも思わせるような写真も残されている。特に注目すべきは、大洲城の異様な広さをもつ外堀であり、それが中世までの大津としての川湊の機能をもっていたのではないかと思わせる点である。

また、同じく高虎の手による宇和島城とその城下町は、それが海に突き出た城と、その城山とに挟まれた町人町から出発したために、町の発展と共に埋め立て地を広げて行った様子が、古図を比較することによって明らかになるということ、さらにはその埋め立て地は、武家屋敷の場合にはわずかに「浜御殿」を埋立拡張して作ったにとどまるのに対し、民間利用としては海運による発展とおそらくは人口増加による新田開発などをうかがうことができる。

こうして、城郭と城下町から中世から近世への変遷の様子を知ることができ、またその後の発展をたどることもできる。しかし、本論はまず何よりも伊予国を対象としながらも、1602年から1604年にかけて藤堂高虎によって築城された今治城を扱っていないと大きな欠点をもつものであり、今後検討しなければならない。また本論では、江戸時代に入ると戦国時代までの武士階級の存在意義が失われ町人による産業の発展があったという記述になっているが、江戸時代においても武士の役割が喪失したわけではなく、産業、あるいは文化面において果たした役割は小さくない。これについての検討が必要である。こうしたことを含めて、信長以来の空間の求心的組織化として現れた軍事的-産業的近代化が、その後どのように展開されたかを問わねばならないであろう。そして、室町幕府の館の模倣として全国に広がった中世の館城が、信長以来の城と城下町の形成へと変化したとしても、実は「中央権力とその模倣」という考え方は、中世から近世へと受け継がれているとも考えられる。それが、江戸時代における藩体制、そして明治以降の近代国家建設においてどうなるのかという大きな問題についても考える必要がある。